

留学を終えて

帝京大学可見高等学校 西村 咲良（アメリカ）

ネバダ州ラスベガス。私は、カジノやホテル、煌びやかなエンターテイメントの街から車で20分ほど離れた郊外の公立高校に1年間通いました。アメリカでの留学先は自分では選ぶことは出来なかったのですが、私を選んで受け入れてくれたホストファミリーには感謝の気持ちでいっぱいです。



ラスベガスの高校に通うことになり驚いたことは、早朝7時に1時間目が始まり、午後1時には最終の6時間目が終わることです。そのため毎朝6時半のスクールバスに乗って通学しました。代わりに放課後は、クラブ活動をするなど自由な時間がありました。私の通っていた高校には、2400人程の生徒、日本で言うと中3から高3までが通っていました。私の住んでいた地域は主に白人が多かったので、通っていた高校も白人が半分ほどを占めていました。そしてヒスパニック系が約3割、残りの2割は黒人やアジア人などが占めていました。アジア人は少なく、学校内に日本人は私を含めて3人だけでした。

コロナウイルスの影響や、アジア人がマイノリティであることから、最初はアジア人差別を受けるのではないかと考えていました。しかし、学校では、私が日本から来た留学生と特別視するのではなく、スクールメイトとしてみんな気さくに接してくれました。学校では様々な個性を持った生徒がいたのでとても楽しかったです。

私がアメリカ留学をして驚いたことは、主に三つあります。まず一つ目は、アメリカ人のフレンドリーさです。アメリカでは、初対面であっても、簡単な挨拶から始まりすぐに会話が広がります。スーパーなどへ買い物に行った時も、レジの店員さんと会話を楽しむという習慣は、特に私の好きなアメリカでの習慣でした。二つ目は、家事の分担についてです。日本では、母親が主に家事をすることが一般的ですが、アメリカでは家事は誰がするものと決まっているのではなく、家族全員それぞれが平等に自



分の役割を果たしていました。私もホストファミリーと一緒に生活をする中で、自分の洗濯物はまとめて自分の出来る時に洗濯をしたり、朝食の準備は自分でするなど、自分のことは責任を持って自分ですることを心がけました。三つ目は、アメリカの学校には掃除の時間がないことです。そのため、学校をきれいにするという意識が日本よりも低く、トイレが汚れていたり、校内にゴミが落ちているということが多くありました。私はいかに日本が清潔に保たれているかを実感しました。このように、アメリカ留学を通して、日本の良さに多く気づくこともありました。また、日本に興味を持っている子が多くいたことも驚きでした。私の学校には日本語クラスもあったので、そこで日本語を教えたり、ホストファミリーに日本食を作ってあげたり、書道を教えてあげたりしました。自分の国の文化に興味を持ってくれている子がいるということに喜びを感じると同時に、質問をされた時に上手く答えられる様、母国の文化についてもっと知る必要があるなど感じました。

この1年間を振り返って最初に思い浮かぶことは、チアリーディングを通して一緒に友達と過ごした時間です。私は日本の高校でチアリーディングをやっていたので、本場のアメリカのチアリーディングのチームに入るために、トライアウトというチームオーディションを受けました。その結果、高校選抜チームに選ばれたことで、高校のアメフトやバスケの試合で応援したり、学校内のイベントでパフォーマンスをしたりしました。それだけでなく、クリスマスパーティーや最後のお別れパーティーなど、多くの時間をチームメイトのみんなと一緒に過ごしました。彼女達は、私と一緒にランチを食べようと積極的に声をかけてくれるなど、いつもフレンドリーで明るく、とても優



しかったので、最初は慣れなかったアメリカでの高校生活も、いつも笑顔で過ごすことができました。アメリカの同じ10代の子たちと一緒に英語でコミュニケーションが取れたことは、本当に楽しかったです。チアリーディングを通して、私は沢山の素敵な友達に恵まれることが出来ました。彼女達はいつも私のことを気にかけてくれていましたが、最初は、私はただみんなの話を笑顔で聞いているだけの時が多くありました。しかし、私は会話に入ってもっと仲良くなりたいという気持ちがあったので、少しずつでしたが自分から積極的に声をかけて話すなど、会話に入る努力をしました。そうしていくうちに、私の英語のスピーキング力も自然と上達し、友達も私をより認めてくれる様になりました。最後のお別れの際には、チームメイトそれぞれに向けて書いた手紙を渡し、みんなで一緒に別れを惜しむほどの深い絆を築くことができました。英語だけでなく、自分の好きなことを通してより仲を深めることが出来て本当に嬉しかったです。

今回の留学を通して私が1番大きく学んだことは、自分の好きなことを持つことの大切さです。私の場合、好きなことでもあり得意なことでもある「ダンス」が、私と友達との距離をより縮めてくれました。もちろん英語はコミュニケーションを取る上で必要不可欠ですが、それは手段であって、それだけではなく自分の好きなことを見つけ、追求することの大切さを感じました。例えそれが秀でていなくても、自分の「好き」を知っていると知っていないとでは大きく違います。アメリカでは個性を育てる教育方針が取られていて、それと同時に個性がとても重視されます。例えばアメリカの高校では、幅広い分野の選択科目がありました。ダンスや歌、クッキング、ビジネス学から心理学まで様々なクラスがあり、自分で選ぶことができます。アメリカの高校では、そのように自分の好きなことを見つけ、伸ばす工夫がされた教育方針が取られていることに感心しました。

このようにアメリカの高校へ1年間留学し、貴重な経験をすることは私の力だけでは実現し難いものでした。両親や学校の先生方の理解とサポート、そして岐阜県教育委員会の留学支援制度による支援のおかげで、こうして私の将来に大きく繋がる沢山の経験を得ることができました。今後も、私をいつも支えてくれる周りの方々への感謝の気持ちを忘れず、今回の留学経験を活かし、新たな目標に向かって努力し続けていきます。

